

I.:O.:S.:魔術トラクト

T M O 1

聖四文字の呼吸



THE OFFICIAL ORGAN
OF
I.:O.:S.:

PUBLICATION IN CLASSES C~D
IMPRIMATUR : M FRATER I.:O.:S.:

First published 2008 by I.:O.:S.:

This Edition online ver.1.1, 2010.

All rights reserved. Copyright © 2008, 2010 by Tzutom Akibba, I.:O.:S.:

1 概要

聖四文字の呼吸の実践法の典拠は、初期ハシディズムの導師ベルディチェブのラビ・レビ・イッアクが示した単純な技法だが、その思想的背景は深淵である。

呼吸によって無の性質、アイン、つまり、原初の光を想起し、呼吸によって有の性質、圧搾された光、つまり、闇を想起するものである。きわめて簡潔な技法であるが、活動界と神霊界の境界を越える有力な手段となる。

ラビ・イッアクの事績については、マルティン・ブーバーの高名な書籍を参照されたい。⁽¹⁾

2 創造と二つの光

(1) 無と有の領域

人間とは「何か（**מה** マー）」と「何かではないもの（**בלי מה** ベリ・マー）」との間に生まれた矛盾する存在である。⁽²⁾

ベリ・マーという言葉は聖書に現れる。「**תו לארץ על בלי מה**（大地は何かではないものに吊り下がっていた。）」（『ヨブ記』26:7）

「有（マー）」と「無（ベリ・マー）」との関係は「無から有を（**מי ש' עש' מ' אין** エシュ・マイン）」という言葉で表される。それはラテン語で「無からの創造（Creatio ex nihilo）」と呼ばれる創造の神秘を解釈するヘブル語の言葉だ。この「無（**אין**）」から「有（**יש**）」の創造というプロセスは、実は段階的な因果関係を示すのではなく、「無」と「有」という二つの位相が同時に存在し、存在しないという矛盾した状況を示すものだ。

これは『ゾーハルの書』にある「原空間（**טהרל** テヒルー）」（Z II 277a）において意味をもつ。原空間は、「神性の非存在」と同時に「神性の充溢」である。もし、原空間が神性に満たされているなら、神以外の何ものも存在できない。また、神性が全く存在しない空間であるならば、そこにはやはり（被造物は）何ものも存在できない。

イサク・ルーリアはこの矛盾を「収縮（ツィムツム）」の理論のなかに展開した。

ラムハルの解説書においては、「主が意志を発し、森羅万象を創造するため、被造物の存在できる空間（**מקום**）を作るために光を収縮させた。空間なくして何者も存在できないからだ。」とある。⁽³⁾

その情景を神話的な語り口で描写すると次のとおり。

原初に創造主は、全空間を「上なる光（オール・エリヨン。**אור עליון**）」⁽⁴⁾で満たしていた。上なる光は、文字通り無限光であり、境界や限界というものはなく、すべての宇宙に充溢していた。そのため創造主のほかには何もなく、主はいかなる影響力を行使することもできず、ひとりだった。⁽⁵⁾

主が万物の創造を意図したとき、最初になすべきことは上なる光に限界を定めることであっ

(1) Martin Buber, *Tales of the Hasidim: The Early Masters*, New York : Schocken Books, 1975, pp.203-234.

(2) Gershon Winkler, *Magic of the Ordinary*, Berkley : North Atlantic Books, 2003 ,p.27.

(3) Rabbi Afilo, *The Kabbalah of the Ari Z'al*, Montreal : Kabbalah Edition, 2004, op.sit.pp.26.

(4) Rabbi Yehuda L.Ashlag, *Ten Luminous Emanations from Rabbi Isaac Luria*, Vol .1, Jerusalem : Research Centre of Kabbalah, 1969, p.56.

(5) この件については『ティクネイ・ゾーハル』57章に、主の全能と内在を表現する「かれが空となる場所はない。」という有名な表現がある。その意味についてはポレンノイのラビ・ヤーコフ・ヨセフの著作（R.Yaakov Yosef of Polennoye, Ben Porat Yosef, "The Place that was't" in *The Religious Thought of Hasidism*, Text and Commentary, Hoboken : Trust of Yeshiva University Press, 1999, p.21.）を参照のこと。

た。主の光はあまりにも神聖であり、強烈であったため、上なる光の近傍にいかなる存在も許さなかった。そこで主は光の放射力を弱め、境界を定めて、被造物が存在できる空間を生み出し、峻厳と限界の概念を開示した。これがアインソフのツィムツムであり、ある空間からの上なる光の収縮、そして収縮により生まれた空間を上なる光が周回した。

しかし、主がすべての光を消した訳ではない。かの「白き火の上に黒き火で書かれた」とは、限定された光の不在を表現する文言である。ヘブル語の文字は白地の紙のような「白き火」の上に黒墨のような「黒き火」で書かれる。それは白日の陽光のなかに淡い蠟燭の光を見るようなものである。つまり、見える部分は陰画のようなものである。それ故にラビ・イッアクは、「律法に一文字といえど書き足すことはできないが、黒き文字の白き行間に言葉が現れる」と語ったのである。⁽⁶⁾そして、否定存在の光たる上なる光は、被造物の創造される空間の残光を囲い込む。⁽⁷⁾

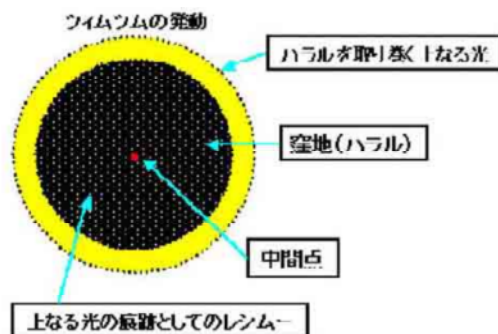
従って、ナハマニデスの言うように「主は光を形作り、闇を創造された（**יְצַר אֹר וּבִרְא חוֹשֶׁךְ**。イェツィラー・オール・ヴェ・バーラー・コーシェク。）」とも理解できる。すなわち光は主と不可分であり、光は「無からの創造」の対象ではなく、創造以前から存在した。従って、主は闇を創造されたのだ。⁽⁸⁾そして、この闇こそが「黒き火」、つまり、被造物の存在が可能な微かな光の満たされた空間である。

ツィムツムにより造り出された、神の光の存在しない空虚な空間をハラルという。ハラルとは「窪地」の意味であり、その空間に光が欠けていることを示す。

ハイム・ヴィタルによるルリアの秘伝書『十光の流出』においては、次のように語られる。

「虚の空気（**אֵיר רֵיקָנִי**）、窪地（**הַלָּל**）は、単一の境界なき光（**אֹר אֶ"ס**）に満たされ、頭もなく、尾もなく、始まりもなく、終わりもなく、万物は単純で滑らかに均衡が取り、正しく等しくひとつの同じものの親和性のなかにあった。それは終わりなき光（**אֹר אֶ"ס**）と呼ばれた。・・・主が自らを内にある中間点（**נִקְוֶדָה אֲמִצְעִיתִל**）に収縮（**צִמְצָם**）する前に、光を制約（**הֶאֱרַם צִמְצָם**）し、主自らを制約（**אֶת עַצְמוֹ צִמְצָם**）した。光は中間点の周囲に収縮し、窪地、虚の空気、真空が中間点を正確に取り巻いていた。」⁽⁹⁾

最初にわかりにくい単語を解説する。中間点とは、アインソフが創造を意志した瞬間にアインソフの内部に仮説されたツィムツムのための焦点である。そもそも「上なる光」には、初まりもなければ、終わりもない。従って、その中間点とは字義的には無意味である。しかし、原初の「単純で滑らかな無限定の意志」には、存在の階級、ニュアンス、程度の違いもなければ、大小の差違もない。しかし、ここに「受け取ろうとする意志」が生まれる。そして被造物という成果を受け取るためには、ツィムツムの起点となる中間点を初まりも終わりもない光のなかに設定する必要があった。



(6) Martin Buber, op.cit., p.232.

(7) Rabbi Moses Luzzato, *General Principles of Kabbalah*, Jerusalem : Research Centre of Kabbalah, 1984, p.48.

(8) Rabbi Yehuda L.Ashlag, vol .1, op.cit., pp.43f.

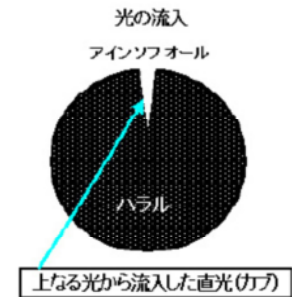
(9) Rabbi Yehuda L.Ashlag, vol .1, op.cit., pp.59-74.

ツィムツムにより中間点を意識したアインソフの状況を上図のとおりとする。黄色の領域は無限定の「上なる光」の領域である。中心に示した深紅の点は仮想の「中間点」である。仮にそのイメージを丸いかたちで表現したが、「上なる光」に境界がある訳ではない。

ツィムツム以前には、主の光の外側も内側も存在しない。最初の創造のはじまる直前の中間点はツィムツムにより、主の光の内側となるはずの仮想点である。⁽¹⁰⁾

ツィムツムが発動し、主の意志により「上なる光」が制約され、中間点の周りから収縮し、中間点を丸く囲んだ様子が右上図である。このとき中間点はすでに特別な座標ではない。中間点の周りは窪地（ハラル）となり、このハラルの中には「上なる光（オール・エリヨーン）」と比較すると、光の痕跡ともいべき粗い光が存在する。それをレシムーという。レシムーとは「痕跡」という意味である。そして、ハラルが生み出した万物の存在可能な場を、被造物は宮殿（マコム）と呼ぶ。

次に生まれるプロセスにおいて、ハラルを取り巻くアイン・ソフ・オールから「直光（カブ）」がレシムーのなかに流入する。右に図式化したように薄暗いハラルの外側はすべて「上なる光」で埋め尽くされている。その純粋な光がハラルのなかに、直すぐな光（**כח** カブ）として射し込む。



カブとレシムーとは、あたかも霊魂と肉体との関係に擬される。⁽¹¹⁾

この光が同心円上にセフィロトを生成し、砕け、再び流出が開始される。しかし、その経緯を語るには紙数が足りない。

この原初の動的なプロセスが終了したあと、安定した静的な宇宙において、力動的な源泉は容易には見えなくなった。現在の世界を示す『ゾーハルの書』は、次のように語る。

「聖なる源泉は隠されかつ開示されたり。」（Z I 64b）

世界創造のとき、聖なる光は最終的には二つに分かれた。片方の「偏在する光」を **אור**（オール）と呼び、他方の「圧搾された光」を **קושיק**（コーシエク）と呼ぶ。

いわゆる光とされる「偏在する光」は神性から流出した究極感である。そこに妥協や分割の余地はない。「偏在する光」は絶対の単一性を希求する。この光はそれ自体で完全な単一であり、異者の終わりを探し、万物を自己に引き戻す。従って、この光は被造物を盲目にする。被造物は、この光を理解できない。被造物は、宇宙に偏在し、宇宙を飲み尽くす光たる神を直視できず、把握できない。

一方、闇に比肩される「圧搾された光」は、万物を飲み込むブラックホールである。カバラの世界では、「反対側」（**אחרא אורא** シトラ・アーラ）として知られている。アーラというヘブル語は、同時に「後ろ」、「のちに」、「別の」という意味を有する複雑な単語である。神性のブラックホールは、人間の背後から回復を試み、被造物が流出、進化してきた源泉である被造物の根、そして同時に反対側で、時間的にはのちになる座標で、被造物の到着を待っている。

圧搾された光たるコーシエクは、「闇」または「薄暗がり」と呼ばれる。

何故なら、「偏在する光」と同じ光でありながら、被造物を飲み込み存在を許さない「偏在する光」とは異なり、被造物が見ることができ、生き、個体として存在し得るだけの十分な薄暗さを備えているからだ。聖書の記述を思い出してもらいたい。モーシェが主と対峙したとき、主は「わが面を見ること能わず。わが面を見て生き長らえるものはない。」と言われた。モーシェは主の背後を拝んだ。（『出エジプト記』33:18-23）

つまり、モーシェは「偏在する光」を直視しようとしたが、この世界においては、直接的ではない反射光、顕現するその影を見ることしかできない。

『ゾーハルの書』においては、「偏在する光はコーシエクを纏う。」（Z I 22b）とされる。また、「エロヒムは闇、コーシエクを纏う。」（Z I 16b）とされる。

(10) Rabbi Yehuda L.Ashlag, vol .1, op.cit., pp.68f.

(11) Rabbi Afilalo, op.cit., p.27.

しかし、前述したようにコーシエクも光である。

『バーヒルの書』においては、ラビ・ネフニア・ベン・ハカナの言葉を引いて、「コーシエクも光も異なることはない。」と結論している。⁽¹²⁾

さて、この「圧搾された光」（コーシエク）の領域は、オラーム (אורם) である。オラームは通常、「世界」と訳されるが、その語幹の אור は「秘匿された」、「隠された」、「消え去った」という意味である。

創造された世界は、創造主を秘匿する。そして、オラームの領域では人間は自由意志を発揮できる。そこでは、大きな「われら」ではなく小さな「わたし」でいることができる。オラームの領域においては「絶対性」は異物であり、沈滞を嫌う。シトラ・アエラにおいては、神は静的であり、オラームにおいては動的である。オールは、相違を探して除去し、万物を合一させようとする。コーシエクは、相違のなかに合一を探す。オールは、われらはひとつであり、同じだと主張する。コーシエクは、われらはひとつであるが、同じではないと主張する。

そして、神秘の技を心得た者がふたつの領域を見据えて、オールとコーシエクの間に、シトラ・アエラの領域とオラームの領域の間に、神秘的な舞踊を演じるとき、ふたつの領域は調和をたもつ。

(2) 神聖名

バアル・シェム・トブの弟子であったクロノスのラビ・ハイムは、建物の間に張り巡らされたロープの上で踊る男を弟子たちと一緒に眺めていた。弟子たちはこのサーカス紛いの見せ物をどう思うかと師に尋ねた。

ラビは「かれが何のために生命を危険に晒しているのかは判らないが、高い綱の上にいる間は、芸で得る賃金を考えることはできず、いま正に踏み出した一歩や、次に踏み出すだろう一歩を考えることもできない。いまだここにいるかさえ考えられず、もし、我に返れば死の深みに墜ちてしまうだろう。男は全く自分に気づいていないのだ。」と答えた。⁽¹³⁾

ラビ・ハイムは、卑俗な芸人のなかに「心を無にする」行為の実践例を示した。

心を止めるということに関しては、メズリッチのラビ・ドブ・バエルは、律法を教える最良の方法は、世界の声が自分を介してどのように語るかを聞く耳になり、（世界の声を代弁する）自分の声を聞き、そして止まることだと示した。⁽¹⁴⁾

神の最も根源的な名前、シェモート・エメスは、聖四文字 איהוה と「燃える柴」のエピソードにおける איהוה である。エリッヒ・ノイマンは、人間の自己と自我の対比を聖名エヘイエーの上で解釈した。もとより、エヘイエー・アシェル・エヘイエーを「われは、われありなり」と解釈するとき、その意味は「われあり」＝「自己」と「われはわれありなり」＝「自我」とのせめぎ合いを導出する。そして、「われありなり」という意識の一点は、あたかも凝固した一閃のように時間外的意識であって、「自己」の側から見れば没時間的に存在し、「自我」の側から見れば時間的経過のなかで時間のなかに入ってくるものである。⁽¹⁵⁾

聖四文字 איהוה については、ゲマトリアにより無数の名前が生み出された。

アブラハム・アブラフィアは『オール・ハ・セケル』において、「聖四文字は、ふたつの構成物を持ち、ふたつの愛、天上の愛と地上の愛との結合により生まれる。そして、1と1からなる。神聖なる存在と人間存在との結合に・・・」⁽¹⁶⁾と語った。

(12) Aryeh Kaplan, *The Bahir*, York Beach : Samuel Weiser, 1979, p.1.

(13) Martin Buber, op. cit., p.174.

(14) Martin Buber, *Hasidism and Modern Man*, Far Hills : Horizon Press, 1966, p.195.

(15) エリッヒ・ノイマン「生きることの意味と個人」『エラノス叢書4 人間のイメージ II』、平凡社、1991年、145-148頁。

(16) Moshe Idel, *Studies in Ecstatic Kabbalah*, New York : State University of New York Press, 1988, pp.66f.

יהוה = ヨド (10) + ヘー (5) + ヴァウ (6) + ヘー (5) = 26

אהבה = アレフ (1) + ヘー (5) + ベト (2) + ヘー (5) = 13

従って、神聖なる知性的な愛情 (アハバー・エロヒト・シクリット) と人間の知性的な愛 (アハバー・エノシト・シクリット) という天上と地上の愛の結合 (13 + 13) が聖四文字となる。

或いは、אה (単一) の数も 13 であることから、13 + 13 である。

イッユーン学派は最重要の神聖名、יהוה と יהוה ʾが、四種類の文字から構成されることを重視し、それらを再構成してひとつの神聖名を作り出した。⁽¹⁷⁾

יהוה (ヨド・ヘー・ヴァウ・ヘー) }
יהוה (アレフ・ヘー・ヨド・ヘー) } → יהוה (アレフ・ヘー・ヴァウ・ヨド)

かれらの主張によれば、四つの子音アレフ・ヘー・ヴァウ・ヨドは、ヘブル語では、母音文字 (matres rectionis) ⁽¹⁸⁾ として用いられるが、同時にアヘヴィーという神聖名を形成する。その教えを集約した『セフェル・ハ・イッユーン』によれば、アヘヴィーは指輪に封じ込められた名前であり、大地そのものがこの指輪で封印された。アヘヴィーの数は 22、つまりヘブル語アレフベートを包摂し、この名前からヨド・ヘー・ヴァウ・ヘーとエヘイエーの 2 大神聖名が創造されたという。アブラハム・アブラフィアはこの名前を「秘匿文字」と呼んだ。何故なら、いかなる正典偽典にも現れず、注意深く隠された名前であるからだ。⁽¹⁹⁾ アブラフィアは聖四文字は、ヨド、ヘー、ヴァウの 3 文字と母音アレフからなるとして、この יהוה と יהוה ʾ という名前を示した。⁽²⁰⁾

母音 (準母音) の置換という概念は、イッユーン学派に先立ち、アブラハム・イブン・エズラの『セフェル・ハ・シェム (名前の書)』に陳述されている。聖四文字においてヘーが二回出てくるが、ひとつのヘーは同じ母音 (準母音) で置換できる。すなわち、アレフである。しかし、イブン・エズラは文字の順番の変換までは示唆していない。⁽²¹⁾

イッユーン学派のさらに先鋭的な主張によれば、この名前アヘヴィーを逆転させた名前ヨド・ヘー・ヴァウ・アレフ (יהוה)こそ、宇宙創造より前の神の真実の名前であって、所謂「聖四文字」のヨド・ヘー・ヴァウ・ヘーとは、この世界を創造するという目的のためだけに使用された「真の聖四文字」の代用品であるというものだ。⁽²²⁾

イッユーン学派の「真の聖四文字」と一般に流布している「聖四文字」は、末尾の文字がヘーからアレフに変わっただけである。イッユーン学派の『四文字の名前に関する解説』には奇妙な説明がなされている。ラビ・ユダ・ベン・ベテイラーが仲間たちと、三年間『セフェル・イエツィラー』について学習したおり、アレフベートの組合わせ操作のなかで人間を準創造した。有名なゴーレムである。その額にはヘブル文字で、אֱלֹהִים יְהוה と書かれていた。そこでラビはただちに文字エメスのアレフを消し、メス (死) とした。これは典型的なゴーレム制作挿話のようだが、アレフを消した理

(17) Gershom Scholem, *Origins of the Kabbalah*, New York : Princeton University Press, 1987, p.315.

(18) 現在のヘブル語の解説では、ヘブル語の文字は全て子音であり、母音記号 (ニクダ) を入れて発音する。しかし、ヨド、ヴァウ、ヘー及びアレフと母音記号の組合わせを準母音という。聖四文字とエヘイエーは、準母音のみで構成されていると見なすこともできる。

(19) ゲルショム・ショーレム 「神の名とカバラーの言語理論」、『エラノス叢書 9 言葉と創造』、平凡社、1995年、119-120頁。

(20) Moshe Idel, *Enchanted Chains : Techniques and Rituals in Jewish Mysticism*, Los Angeles : Cherub Press, 2005, pp.85f.

(21) Eliyahu Rosh-Pinnah, "The Sefer Yetzirah and the Original Tetragrammaton", in *The Jewish Quarterly Review*, Vol.57, No.3, Pennsylvania : The University of Pennsylvania Press, 1967, p.223.

(22) ショーレム前掲書、122頁。

由を問われてラビは秘教的知識の隠匿に関する講義を行う。⁽²³⁾

盲目のイサクの弟子アシェル・ベン・ダビドは『シエム・ハ・メフォラシュの解説』において、アレフとヨドの関係について詳述した。

子音アレフは母音を発声する際の喉頭の声の起点であり、アレフベート（アルファベット）系列の始まり、究極的には発声される個々の音がそれに由来する要素となる。

アレフの活動とは、いまだ声なき音声の起点の活動から、いかにして神聖名が、それに続きすべての言語が起こるのかという考察に結びつく。アレフ自体は、この展開のなかにおいて、たとえ消えゆくとはいえ、なおもすべての語りのゼロの点、「神の等価を示す指針」であり続ける。⁽²⁴⁾

また、アレフは「無限にまでの高み」（ $\aleph$ ）とも、「無限にまでの意志」とも呼ばれ、第一のセフィラ、ケテルを示す。⁽²⁵⁾

モーシェ・コルドヴェロは、『石榴の園』のなかで、右図のように聖四文字を内包するアレフを示している。また、簡易なカバラの紹介書において「アレフにより拡張した（聖四文字の）名前は活性化したコクマーのなかにある。しかし、各セフィラは10（のセフィロト）を内包する故に、聖四文字の名前もそれぞれにある。」⁽²⁶⁾として、ケテルに母音記号カメッツを付して、ヤーハーヴァーハー、コクマーにパタハを付してヤーダーヴァーダー、・・・イエソドにシュレクを付してユードウーヅ、マルクトに母音記号なしとして平明なヨド・ヘー・ヴァウ・ヘーという発音を紹介している。



イッユーン学派の見解は特殊なものであり、一般化しなかった。しかし、『セフェル・イエツィラー』のなかに、神名に関する秘密の知識が隠されていると信じる者は多い。イッユーン学派の少し前に成立した特別なケルブ学派（Unique Cherub Circle）においては、「エロヒムは光あれ（創世記1：3）とある「 $\aleph$ 」は神名である。「 $\aleph$ 」と「 $\aleph$ 」とが同一の神名であるように、『セフェル・イエツィラー』の三文字の六つの組み合わせも神名であり、これを印として宇宙の空間的次元は創造された。」⁽²⁷⁾と言われた。

比較的最近の主張としては、ヘブル文字の順序、母音（準母音）の原発音と古代の神名が母音のみ構成されていたとする主張等を組み合わせて、現在、流布している「 $\aleph$ 」なる文字は、古代ユダヤの神殿の祭司が神の真の名前を隠匿するために偽造した語順であり、正しい聖四文字は「 $\aleph$ 」であるとする論文も出ている。⁽²⁸⁾ その主張は、次のとおり。

『セフェル・イエツィラー』の三母音（アレフ・メム・シン）の背後に聖四文字の鍵（アレフ・メム・タウ）が隠されている。イブン・エズラの論説のとおり、聖四文字のひとつのヘーはアレフで置換される。原聖四文字（ウル・テトラグラマトン）の起源は想定されているよりも古代に遡る。エジプト神官、ピタゴラス派の祈祷にあるように太古の隠された神の名前は母音のみで構成されており、その順序は、u-a-i-eである。

従って、原聖四文字VAIHは、アレフをヘーに置換され、語順を入れ替えて、現在の代用聖四文字IHVHとなった。

本トラクトでは、紹介するのみに留め、論評はしない。これが真実であれば一般化することを許されない秘教のなかの秘教たるものである。

(23) Joseph Dan, "The'Iyyun Circle" in *The Early Kabbalah*, Mahwah : Pauli st Press, 1986, p.54f.

(24) ショーレム前掲書、116-119頁。

(25) ゲルショム・ショーレム 「初期カバラにおける聖書の神とプロティノスの神の戦い」『エラノス叢書10 創造の形態学 I』平凡社、1990年、264頁。

(26) Moses Cordvero, *Introduction to Kabbalah : An Annotated Translation of His Or Ne'erav*, New York : Yeshiva University Press, 1994, p.142.

(27) Joseph Dan, *The 'Unique Cherub' circle*, Tübingen : J.C.B.Mohr, 1999, p.44.

(28) Rosh-Pinnah, op. cit., pp.212-226.

3 聖四文字の呼吸の実践

ベルディチェフのラビ・レビ・イツァクは、主の僕には、創造主を自己犠牲により崇める者と、戒律を守り良き行いをすることで創造主を崇める者との2種類があると語った。そして前者の奉仕は「無」(אין)の領域であるのに対して、後者の奉仕は「有」(יש)の領域にあるとも語った。律法の規定に従い正しい生活を営む者は、存在や行為により神に仕えるため「有」にある。何故なら律法そのものが「有」の領域にあるからだ。一方、自己犠牲(メシラート・ネフェシュ נפש משיאת)により、アインまたはアイン・ソフの領域にある神に奉仕するものは「無」の領域にあると語った。⁽²⁹⁾

ラビ・イツァクは灼熱のセラフ、火の天使とともに祈る人と呼ばれていた。かれは祈りにおいては肉体のすべての力をもって祈るときと、微動だにせず神への思いに浸るときを使い分けるように指導していた。すなわち、「有」と「無」である。⁽³⁰⁾

かれは「有」を「肉体の衣装」(ヒトパシュトース・ハ・ガシュミユース)と呼び、それを主の前で無化した。この物質性と肉体を捨てた状態でかれの喉を使うのは、主の霊(シェキナー)である。そして、通常の意識状態では主をアドナイと呼ぶが、肉体を脱した状態においては神名יהוהが用いられると語った。⁽³¹⁾

さらに、ラビ・イツァクの見解によれば、聖四文字יהוהの前半の二文字יהは「無の性質」を、後半の二文字והは「有の性質」を表す。「有の性質」は、われわれが自然界と認知する存在の階層をあらわす。そして、「無の性質」は、霊的世界と認知する存在の階層をあらわす。従って、物質界においてיהの意識を獲得すれば、物質を超越することができる。

前述したように、ベリマー(ברמא)という単語は、「なし」という意味のベリ(בר)と「何か」という意味のマー(מא)を結びつけた単語であり、旧約聖書の中ではただ一か所(『ヨブ記』26章7)に使われている。その意味は「何ものもなし」となる。『セフェル・イエツィラー』においてはセフィロト・ベリマーとして十の原数として現された。その際、ベリマーはアイン・ソフと同義と解釈される。⁽³²⁾

一方、カバラの思弁的宇宙論のなかで、「無」を意味する単語はアイン(אין)であり、これは「無限」を意味するアイン・ソフ(אין סוף)と同義である。⁽³³⁾

勿論、微細な人間の視点に立てば両者は異なる。ヘロナのアズリエルは1230年に示した所信は、創造とは「かれ(神)がかれの無をかれの有に為した」ことであり、決して「かれ(神)は無から有をつくった」とは言わないのである。⁽³⁴⁾

そして、すべての存在は神の存在に由来するため「存在を成り立たしめる実体の光」たるアイン・ソフ・オール(אין סוף אור)は拡散して原光に至り、その原光は単に無として表されるのである。⁽³⁵⁾

(29) R. Levi Yitzhak of Berdichev, "Kedushat Levi to Lekh Lekha", in *The Religious Thought of HASIDISM*, New York : Yeshiva University Press, 1999, pp.184f.

(30) Yitzhak Buxbaum, *Jewish Spiritual Practices*, London : Jason Aronson, 1990, pp.157-159.

(31) op. cit., p.449.

(32) ゲルショム・ショーレム 「初期カバラーにおける聖書の神とプロティノスの神の戦い」『エラノス叢書 10 創造の形態学 I』平凡社、1990年、235-236頁。

(33) ゲルショム・ショーレム 「無からの創造と神の自己限定」、『エラノス草書 6 一なるものと多なるもの I』、平凡社、1991年、94頁。

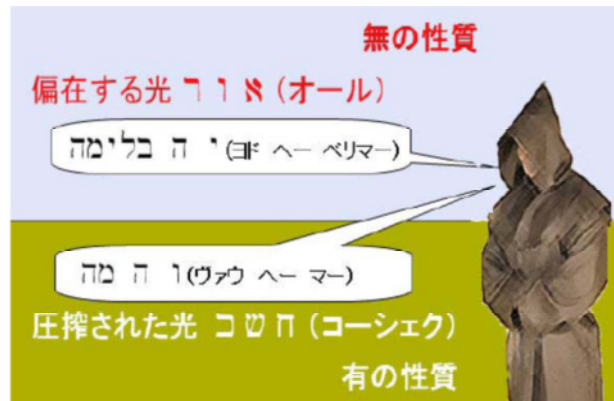
(34) 前掲書、94、95頁。

(35) 前掲書、113頁(原注42)。

人が「無」を想起するのは難しいが、マギド・ダブ・ラブ・ヤーコブは「無」と「神性」との「間にあるもの (in-between)」に集中することが、「アイン体験」を得る手段であると教えた。⁽³⁶⁾

多言を費やしたが、所詮、「無」を体験することは、推論的思惟ではなく直観の領域に属する。この神そのものたる神秘的な無に関する直観を得ることが大切なのだ。⁽³⁷⁾ そこで聖四文字の呼吸法を用いることになる。

聖四文字の呼吸においては、ベリマーが世界が流出を開始する以前の「無の性質」に直結し、マーが流出後の「有の性質」を表現する。



呼吸法において、**יהוה** を詠唱する際は、「ヨー・ヘー」と発声する。瞑想中は、呼吸する際に喉を空気が通る音ぐらいの高さで囁く。息を吐きつつヨーと詠唱し、息を吸いしつつヘーと詠唱する。その際は、心中にそれぞれの文字を視覚化する。⁽³⁸⁾

「ヨー」 (呼気) 「ヘー」 (吸気) 「ベリー・マー」 (無の性質を強く意識する。)
「ヴァウ」 (呼気) 「ヘー」 (吸気) 「マー」 (有の性質を強く意識する。)

発音は小さな声で囁くように行う。息を吸いながら発音するのは難しいが、無理に大きな声を出す必要はない。その音は術者の心のなかに響きわたれば良いのである。

無の性質を想起する際には、光が王冠の流出してきた無の点に収縮する様子を視覚化してもよいだろうし、文字アレフが反転して消失する様子を視覚化するのも効果がある。あるいは光体から光が抜け出ていく皮膚感覚を惹起するのも効果的だ。どのような心理的な補助手段を用いるのも自由であるが、強く無を想起することは忘れてはいけない。

有の性質を想起する際には、広がる大地と世界を視覚化しても良い。マーの振動に光体を浸すもよし、周囲の家具や建物、樹木などが圧搾された光の格子であるとイメージするのも良い。もちろん強く有を想起すること。

この「聖四文字の呼吸の」の応用は多岐にわたる。

単独で瞑想と併用する場合は、上図のように下方に有の領域、上方に無の領域を仮想し、呼吸を繰り返すことにより、境界を越えて無の領域に徐々に引き上げられていく。

魔術儀式に構成した場合は、境界を跨いだアストラル・ライトのなかで、「無の性質」を象徴するヨド・ヘーの呼吸と「有の性質」を象徴するヴァウ・ヘーの呼吸を併用し、光の祭壇の上に「有と無の融合」を現出させる。

(36) Auram Davis, "Jewish Meditation Today and Its Obstacles", in *Meditation from the Heart of Judaism*, Woodstock : Jewish Lights Publishing, 1997, p.85.

(37) ショーレム前掲書、81頁。

(38) Gershon Winkler, *Magic of the Ordinary*, Berkley : North Atlantic Books, 2003, p.30.

**VERBORVM PVBLICA
I ∴ O ∴ S ∴
TRACTATVS MAGICVS PRIMVS
ANIMA TETRAGRAMMATON**

**IMPRIMI POTES : I ∴ O ∴ S ∴
NIHIL OBSTAT QUOMINVS IMPRIMATVR
IMPRIMATVR : M.E.S.A.5=6
APRILIS MCMXCXVIII**

聖四文字の呼吸 TM 01

Copyrights © All rights reserved I ∴ O ∴ S ∴ 2008

2008年4月19日 I ∴ O ∴ S ∴ 発行

本トラクトは、団員の魔術実践への理解を促進するために作成された。本トラクトを利用した団員の自由な実践活動を妨げるものではないが、会員外の使用については、本トラクトの著作権が秋端勉に属することを配慮されたい。

本文書の内容の一部または全部を、I ∴ O ∴ S ∴ または著作者の文書による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、引用、転写することを禁じる。

表紙画 : ウィリアム・ブレイク『恋人たちの嵐』1824年－1827年